

日時 平成24年4月26日（木）9：00～12：00

会場 高知会館 飛鳥の間

出席者 受田浩之委員長、岩原利枝委員、垣内守男委員、川上恵美子委員、
小西砂千夫委員、坂本あや委員、澤田靖子委員、瀧本 豊委員、
濱川博子委員、宮上多加子委員、宮崎育子委員、宮地貴嗣委員、
山崎實樹助委員

教育長（中澤）、教育次長（中山）、高等学校課長（藤中）、
高等学校課企画監（森本）、教育センター所長（濱田）、教育政策課長（岡村）、
生涯教育課長（平野）、小中学校課長（永野）、高等学校課補佐（竹村）、
特別支援教育課補佐（平野）、人権教育課補佐（大西）、
高等学校課再編振興担当チーフ（竹崎）、同課学校教育企画担当チーフ（高野）、
同課学力向上担当チーフ（山田）、同課定通・産業担当チーフ（北村）、
高等学校課指導主事（5名）

欠席委員 吉岡珍正副委員長、那須清吾委員

1 開会

（1）教育長挨拶

（2）委員交代について

（受田委員長：以下委員長）今春の人事異動に伴う、委員交代について事務局から説明がある。

（事務局）岡田健委員の定年退職に伴い、新たに垣内守男氏を県立学校長協会長の立場で検討委員会委員にお願いしたい。

（委員）＜確認＞

（委員長）今回から岡田委員に代わり、垣内委員に検討に加わってもらう。

（垣内委員）＜あいさつ＞

（3）日程説明、資料確認等

【配布資料】

① 次第

② 座席表

③ 平成24年度 県立高等学校再編振興検討委員会委員名簿（案）

④ 平成24年度 県立高等学校再編振興作業部会委員名簿（案）

⑤ 資料1 第4回県立高等学校再編振興検討委員会 資料

⑥ 資料2 第4回県立高等学校再編振興検討委員会 資料

⑦ 資料3 第4回県立高等学校再編振興検討委員会

普通科（連携型中高一貫教育校を含む）・総合学科の特徴、現在の再編計画に基づく改編による成果等、課題について

⑧ 県立高等学校再編振興計画策定までの日程（案）

⑨ 高知のキャリア教育

2 第3回県立高等学校再編振興検討委員会の内容確認

(高等学校課企画監：以下 企画監) 資料1-1の説明。

(委員長) 指摘事項や不足事項はないか。

(坂本委員) 資料1-1-4 (2)定時制・通信制について、①に記載されているキーワードの「多様化」は、大切であり共感できる。

定時制は、今までの勤労生を対象とした定時制と、大方高校などのように新しいタイプの昼間部定時制がある。特に、大方高校、高知北高校、中芸高校については、従来の定時制のイメージと異なる位置付けにあることを再確認する必要がある。

大方高校の昼間部は、全日制高校と変わりなく運営されている。特別な支援を必要とする生徒など様々な志望動機や学習歴をもった生徒だけの学び場ではない。生徒たちは、全日制の高校と変わりなく過ごしている。定時制の在り方が今までと違ってきている点での多様化であると理解した。

(委員長) 多様化がもっている意味が良い悪いではなく、各校で様々な学校運営がされていることの補足説明であった。先ほどの意見が、概要の訂正を必要とする意見ではないので、この後の3 検討内容 (1)確認事項 ②定時制のまとめの中で反映してもらいたい。

(委員長) その他にないか。

(委員) なし。

3 検討内容

<(1) 確認事項>

- ① 第3回県立高等学校再編振興作業部会の概要
- ② 産業教育のまとめ
- ③ 定時制・通信制のまとめ

(委員長) それでは、事務局に① 第3回県立高等学校再編振興作業部会の概要を報告してもらおう。

(企画監) 資料1-2の説明。

(委員長) 事務局の説明に対して質問はないか。

(小西委員) 垣内委員が、昨年度作業部会の委員の立場であったので、作業部会の様子を聞きたい。資料の紙面上は、検討委員会と作業部会の議論は、かみ合っているように見える。作業部会は、現場に近い立場の委員が多いので、検討委員会が現場の意見と違った議論で進んでいるのではないかと心配している。是非、作業部会の雰囲気等を教えてもらいたい。

(垣内委員) 感じたことを述べたい。作業部会は、現場に近い立場の委員で構成され、今までに3回開催された。第1、2回作業部会では、検討委員会から何を求められていて、何を議論したらよいか分からない状態で進行した。各委員が検討の論点を整理をできないまま、現場で感じていることを議論するこ

とに終始した。第3回作業部会では、論点が明確に示され、作業部会に求められているものが分かり、各委員においても論点が整理され議論できた。第3回作業部会は、求められているものに対して様々な角度から議論が行われ、検討委員会からの課題の論点に応えられたと感じている。

(小西委員) 安心した。

(委員長) 第1、2回は、作業部会とのやり取りが機能していないのではないかと懸念していた。第3回から論点を整理し、作業部会に検討事項をお願いしたことから、議論がかみ合ったようである。今後も作業部会とは論点を整理し、やり取りを続けたい。

本日の普通科、総合学科についても、論点整理をしたうえで、作業部会に伝える必要がある。

(宮崎委員) 4 (1) ③ (イ)の「農と医療」についてどのような検討があったか教えてもらいたい。

(企画監) 「農と医療」は、「農と食料」に関連してくる。「食」については、人間の身体に重要なものであるので、医療にも関係してくる。また、薬草など、農業における「食」のもつ力を「医療」に役立てたいとの意味であった。

(委員長) 体内にエネルギーや身体を構成するものを補給する点では、「食」であり、食と健康や生体調節機能の増進については「医療」であるという点で話が進んだと認識した。

(山崎委員) 4 (1) ③ に農業高校の必要性が述べられていると思う。(7)の中に記述されている「農を教育する」と「農で教育する」の考え方にある人間教育は、農業の振興にとって根本に係わる大変重要なことである。また、(イ)地域の教育力の活用についても学校を生かしていく上で、非常に大切な視点である。

(委員長) 作業部会で農業高校の必要性について活発に議論されていたと感じる。

1点だけ質問がある。4 (2) ⑤(7)について、高知北高校の20人学級について詳しく教えてもらいたい。これは、40人学級が多すぎるために、20人学級にスケールダウンすることにより教育効果が上がっていると判断してよいのか。

(企画監) 基本的には、40人1学級である。学校の運用で、40人のところ20人にしている。高知北高校の場合は、中学時代に不登校やいじめなどの経験があり、学校に馴染みにくい生徒の割合が高い。これらの生徒に対応するために、少人数できめ細やかな指導をおこなうために20人学級で運営している。このような運営によって、様々なニーズをもった生徒に対応している。

(高等学校課長：以下 課長) 授業全体は、40人学級で行われている。教員の目の届く範囲が20人であるとの意味である。運用上20人学級であり、20人学級を作っているわけではない。20人学級が4クラスあるという状態ではなく、学校の実態に合わせた運用をしている。

(瀧本委員) 4 (2) ④(7)について、奨学金資金の適用について検討されたか。

(委員長) 奨学金から生徒の経済状況を推測し、生徒の実態を議論したのか。

(企画監) 作業部会では、具体的なところまでは議論していない。学習指導や生活指導を行う上で感じた意見である。

奨学金については、高知県高等学校奨学金制度、高知県県立高校通学支援奨学金制度、高知県高等学校定時制課程及び通信制課程修学奨励資金貸与制度がある。

(課長) 高知県高等学校定時制課程及び通信制課程修学奨励資金貸与制度への申請者はいない状況である。一昨年から、授業料が無償化となり、高知県高等学校奨学金制度の対応者は、新規で年間500名位であったが、授業料無償化により100名程度減っている。授業料無償化による家庭の負担は、奨学金対応者数から見ると軽減されていると推測している。

経済状況についてのデータはもっていない。

(濱川委員) 4 (2) ④(7)には、「感じる」とあるが、ある程度の数値があった方が、高知県の家庭の状況が分かりやすい。義務教育段階では、就学援助制度があり、援助金のサポートを受けている家庭がある。外部には出せないデータであるかもしれないが、義務教育段階での就学援助制度のサポートを受けている家庭数などの数値的資料も必要であると感じる。

高知県高等学校定時制課程及び通信制課程修学奨励資金貸与制度への申請者はいないとの報告があった。教育現場や保護者が制度を知らないから申請者がいないのではないか。

(企画監) 奨学金の申請状況と家庭の経済状況が係わってくることは、理解できる。

作業部会の委員の発言は、現場の立場からの意見である。学校教育で指導していく中で感じた家庭の経済状況である。たとえば、遠足代金やホーム費の支払い状況から感じた意見である。奨学金の制度に対する意見ではない。

(委員長) この件については、定時制だけでなく、本日の議論である普通科や総合学科にも通じる問題であるので、今後、全体を検討する上で家庭の経済状況も考慮しなければならない。日本一学ぶ機会のある県を目指していきたい。

(企画監) 資料1-3の説明

(委員) 異議なし

(企画監) 資料1-4の説明

(委員長) 定時制通信制についてのまとめは、今回の意見を反映し、次回に再提示し確定していきたい。

(坂本委員) 具体的に、このような言葉を入れて欲しいというイメージまでは描けていない。しかし、今のまとめでは、定時制通信制について「暗い」イメージを感じる。これまで県が進めてきた新しいタイプの多部制単位制高校のイメージから、かけ離れている。定時制昼間部、夜間部、通信制は、各校において地域性がある。高知県では、昼間だけが学習の場でなく、昼でも夜でも通信でも、個々のスタイルに応じた学習の場が開けていることを強調してもらいたい。不登校を経験したから、定時制へ行くとの発想ではなく、身近な

場所に、学びたい学校があり、自分のスタイルに合っているから、定時制昼間部に通学する、夜間部に通学する、通信制に通学することが多様性である。

どうしても、不登校を経験したから定時制に行くというイメージを感じる。これらのマイナスイメージを払拭したまじめにしてもらいたい。また、このような開かれた学習環境の学校を県として推進していることを強調してもらおうと、定時制や通信制で学ぶ生徒の励みにもなる。

(委員長) 多様なニーズに対応できる開かれた学習環境をもつ学校のイメージが、昔の固定観念と先入観に押しつぶされ、現実とかけ離れたイメージとなっている。固定観念を払拭する議論があったことを反映させてほしい。

個人的な感想となるが、通信制についてもICTの発達により、通信の在り方も変わってきている現状で、新しい発想があっても良い。まとめの中の通信制は、以前の通信制の論議に終始しており時代錯誤をしているのではないかと感じる。

(濱川委員) 通信制、定時制夜間部で自分の人生を切り拓いている生徒がたくさんいる。朝起きるのが苦手であるから夜間部に進学する、と生徒は決めて進学している。しかし、問題になるのは、大人の意識である。大人側は、多様なニーズに応える学校へのプラスのイメージができていない。定時制や通信制への進学を希望しても、家族が否定したり、マイナスイメージで対応したりしている。大人への啓発が大切であり、大人の意識をどう変えていくか重要な時期にきている。

学校現場が多様化に対応していくことと、大人の意識を変える啓発に取り組むことが大切である。まとめでは、学ぶことだけの記述になっているが、生徒たちが、自信をもって進学する学校を選択できる環境の整備が必要である。中学時代、不登校生も問題行動を起した生徒も全日制にも通っている。大人の意識の中に区別があり、定時制や通信制が不登校生や問題行動を起した生徒の行く学校であると思っている。子どもたちのそれぞれの学校を選んだ気持ちを理解していく必要がある。

(坂本委員) 大方高校、中芸高校は、前回の改編により新しいタイプの学校となった。大方高校では、改編当時、定時制のイメージがデメリットになるのではないかと議論があった。子どもたちが入学時に従来の定時制のイメージをもてば、入学希望者が集まらないのではないかと意見があった。学校が運営されていく中で、今は、定時制のイメージはなくなっている。昼間部と夜間部では差はあるが、学校としてのイメージは、全日制と同じような状態である。

(委員長) ここで、休憩をとりたい。

(休憩)

(委員長) 先程のところ、宮崎委員から追加がある。

(宮崎委員) 資料 1 P 6 の看護・福祉のところである。右側の看護のところの①「より高度化する医療現場に対応でき」とあるが、看護の領域は福祉・保健・産業・教育などの分野にもあるので、狭義な表現だと受け取れる。また、「安全で確実な看護技術をもつ」とあるが、看護技術とともに、質の高い看護を提供できる看護師が必要である。③の部分で「質の高い安定した教育を提供していくために、実習施設や医師講師等の確保」とあるが実習施設はわかるが、看護教育のためには質の高い講師等が必要であり、医師講師と書ききっているところが少し気になる。

(委員長) 産業教育については、ほぼ確定しようとしている。今のような専門的な立場からの意見を、改訂案として事務局に再度提案してもらうことでよろしいか。

(委員) (確認)

<(2) 協議事項>

- ① 普通科（連携型中高一貫教育校を含む）の在り方について
- ② 総合学科の在り方について

(委員長) それでは、協議事項に進めていく。①普通科（連携型中高一貫教育校）の在り方についての説明を願う。

(企画監) 通学時間の集計表（休憩中に配布）及び資料の説明。

(委員長) ②総合学科まで、一括して説明をしてもらった。ここからの協議に関しては普通科と総合学科に分けて議論していきたいと思う。普通科に関しては、連携型中高一貫教育校の話もあったので、ある場合では一緒に議論してもらい、また、ある場合では、それらを区別して議論してもよい。普通科から始めていく。議論としてどういうところから展開すべきか難しいところではあるが、最終的には説明の中にも充足率等の数字が我々にとっては気になるところだ。ただ、この検討委員会においては、様々な視点で高等学校の在り方を大所高所から議論し、また地域的な話もいただきたい。できたら数の話から入るのではなくて普通科に対して生徒、保護者、社会は何を求めているのか、そもそも論から入っていき、それに対して現状がどう対応できているのか個別の課題もあると思うが、高知県の公立高校としての課題等が出てくるようであればそこに的を絞って議論していく。その中で解決する柱ができるのではないかと思う。このような話から入っていき、さらに地域の特性について議論したい。24年度だけを見るのではなくて、これまでの流れから議論すべきである。10年間の再編が間もなく終わろうとしている。そこでの評価、反省、よかった点、などの意見、様々な視点からの考えを聞きたい。最終的には生徒数の減少が起こっていったら、避けては通れない課題なので、どう対応していけばよいのかまで進めていく必要がある。まず、普通科に対して生徒、保護者、社会は何を求めているのか、それに対する対応で議論をしていただきたい。議論を始めるきっかけとして、現場に近い

立場である垣内委員から意見、ポイントをお願いしたい。

(垣内委員) 普通科に何が求められているか、整理はできていないが、私の預かっているところは、併設型中高一貫教育校である。その中で感じたことやそれを運営するにはどういう視点がいるのかについて述べたい。6年前から関わっているが、その間、一貫校への期待がすごく大きかった。それに対して、制度を動かしていく現場サイドはどうであったかということ、与えられた諸条件をいかに活用するかということであった。活用する段階であったのでその制度が良いか悪いか視点が向かっていた。どちらかという悪いことが気になる状態であった。この制度は活用するといった段階から一歩踏み込んでこの制度を成功させるのだという意識をもたなければだめなのではないか、その制度を成功させることが我々の仕事ではないか、どこが良いのか、どこが生かせるのかという視点に立って考えることが必要ではないかと思った。普通科に対する皆さんの期待は進学の実績などが当たり前のように思われがちだが、本当のところはそこで働く現場の先生が、どういう気持ちで働いているのか、どういった生徒に育ててくれるのかということが大事ではないか。預かった生徒をただ大学入試に向けて指導するだけではなく、私たちがどういう子どもを、どういう大人に育てていきたいのか、そういう思いをもって、教育の使命は何なのかを考えてやっていく、それが、普通科に課せられる使命だと考えている。表向きに見える進学実績などにとらわれていると、長いスタンスでの本当の使命は果たせなくなる。

(委員長) 現場の立場からの印象深い意見であった。普通科に求められていることとして、進学の実績はあるのだけれども、そこだけではなく、そのプロセスも含めて教職員の使命感、どういう子どもを育てるのかという本質のところをきっちりと見据えて、その使命をどう実現するか、その結果として進学実績につながっていくというお考えであったと思う。そうやったときにさらに垣内委員に質問であるが、今の発言は理解できるが、現状でそれに関する課題はあるか。

(垣内委員) 私の学校の例でよいか。

(委員長) はい、一般的な話でも具体的な話でもかまわない。

(垣内委員) 私の学校は、中高一貫教育を成功させることが使命である。その使命(ミッション)を達成するためには、何段階かの目標、ゴールが必要である。一気に達成できない。そのミッションを達成させるために、まず、第一ゴールは、まず中学生の学力を伸ばす、それが最初の3年間のゴールである。そして、そのゴールを検証したうえで、そのゴールに向かうには今、自分がどこにいるのかを知ることが大事である。現状はどこかを踏まえて次のゴールを設定する。第一のゴールがある程度達成できたら現状把握に基づく適切な明確なゴール設定をする。ミッションを達成するためには、現状把握とゴールまでの道筋であると考えます。

(委員長) そのことを日々心がけておられるということで、まい進されているので、横たわる課題は具体的にはあまりないと理解する。

(垣内委員) 課題はたくさんあるが、課題はどちらかというとなマイナス面。それを改善するより、良いところをピックアップしてさらに伸ばす。そして弱みが弱みとして感じなくなるといったほうがよいのではないか、弱みを意味のないものにしていく。

(委員長) SWOT分析というのがある。弱みをどう解決していくか、外的要因、内的要因というやりかたがあるがまさにその手法でやっておられる。今からいろいろな課題が出てくると思うが、どういう視点でもかまわないので、何かご発言はないか。

(坂本委員) 先程説明いただいた資料2P2の連携型の嶺北、橋原の志願倍率の違いについて、説明の中で、嶺北には寮がないということで、橋原は寮があるので連携中学校以外からの志願倍率が高いという説明があった。他の地域にも言えることだと思って聞いた。教育委員会の方では、寮があることとないことで子どもたちの志願に影響があると理解しているなら、学校の募集定員に寮が大きく影響してくる。大方高校には寮がなく、幡多農業には男子寮と、女子寮がある。大方高校を希望する生徒の中に、「大方高校には寮がないので、学校には行けない」と断念している例がある。寮があるかないかで、進学高校を決めている。高知県は全県一区になったので希望すれば自分の学びたい学校で、学べることを保証している。学区を撤廃するときの議論では通学の費用については考えないといけないという話が出た。学校は学区撤廃になっても通学にかかる費用がかかっている。黒潮町から宿毛工業高校に通わせるために、3か月分の定期代が約5万円かかる地域がある。それならば寮に入らせてあげたらいいという話になる。そういった要望が上がっているのではないかと思うがそのあたりはどうか。

(委員長) これからの議論のきっかけになる貴重な意見をいただいたと思う。寮の話は、通学環境とか通学費用とかそういったところにもからんできて、そもそも論でいくと全県一区にしているということと、どんなふうにつながっていくんだろうか、充足率が低い地域の学校にとっては、きわめて重要な問題だと思う。指摘、質問から広げていきたいが、先程事務局から通学時間のアンケート結果が示されたが、全県一区になったことで何か変化が起こっているのか、寮に関する要望がどれくらいあって、現実今はどうなっているのか、さらに掘り下げて議論をしていきたいと思う。まだすぐにお答えはできないと思うが、議論として、橋原の川上委員に子どもたちの通学の環境等の視点から意見をもらいたい。

(川上委員) 中山間地域の学校である。地元の高校が中山間地域の活性化につながっている。例えば連携型の特別選抜があるが、橋原中学校から6割から8割の生徒が進学している。地域外から10人以上が入ってきている。橋原高校の魅力が上がっているのではないかと思う。中学校を卒業する段階でどういう職業に就くのか、あるいはどういう学校に進学するのか、なかなか中学校の3年間では、決めかねている生徒もいる。そんなときに普通科に行って3年間でキャリア教育を通して、自分の進む道を考えていこうという中学生も

いる。地元の中学校から禰原高校に進学するが、禰原中学では、現在中学3年生が39人、1・2年生は20人台である。その生徒の6割から8割が禰原高校に行ったとしても16人である。他の市町村から受検してもらうことで充足率をあげていただきたいという思いがある。たくさん的高校生が存在して地元のボランティア等に関わって活躍するということが地域の活性化につながるという現実がある。その中で禰原高校には寮があるが、受け入れができるのか、寮の定員がそれにみあうのか、希望した子どもが全員寮に入れるのかといった問題がある。中学校の寮は快適であり、高校の寮と差がある。中山間地域において、充足率をあげるためにも寮というものは大きい。もし、禰原高校がなかったら近いところで須崎高校になるが、通学時間が1時間を超える生徒もでてくるので、通学費用や通学距離の部分で保護者にとって大変厳しい。

(委員長) 具体的に禰原の事例についての話であった。

寮の話が出ていますが、通学環境の視点で何かないか。

(濱川委員) 仕事の関係で中山間地域に行くことがある。禰原高校にも訪問したことがある。今週の火曜日に訪問した西土佐分校の話である。そこは寮が2種類ある。一つは、高校の寮で、もう一つは四万十市がIターン、Uターン用につくった住宅で、2部屋とリビングのあるところに一人ずつ生徒が住んでいる。住宅の方は無料で市が貸している。高校の寮には指導員がいるが、市営住宅には指導員がない。先生方は心配されたそうだが、何の問題もない。地域と共有している点が大事である。隣にある食堂が食事の場所になっており、食事代だけしかいらぬ。指導員のいる高校の寮からこちらに移ってくる生徒もいる。今の子どもたちは、過干渉にならない方が落ち着くのかなと思う。寮の在り方にも問題がある。

高知市内から入学した生徒の話になるが、いろんな悩みをかかえて中山間地域の高校を選択している。ある生徒は、3年間で僕は変わったと言った。高知市の高校に行ったけれども中退した。同じ高校で留年しようと思ったが、そうしていたらたぶん非行に走っていたと思う。弱い自分が周りにひっぱられていた。中山間地域に来て最初は嫌であったが、3年間で先生や周りの生徒に助けられ、今は大学進学を希望している。中学校では非行傾向にあったが、何が良かったのかと聞くと、先生、地域はもちろんであるが、この大自然の癒しをあげていた。寮と一緒に地域の良さを見直してはどうか。

(委員長) 具体的に西土佐分校の事例から、寮という施設をいかに維持していくのか。そこに住んでいる子どもたちの環境を経済的にどう支援していくのか。そのときに、県立高校でありながら西土佐分校は四万十市の支援がある。県立高校は県立であるが設立されている場所の自治体の関与、これが一つのポイントになる。今、西土佐分校でIターン、Uターン用の住宅を提供する仕組み、市や自治体が補助するといったこういうところが高知県にどれくらいあるのか、データとして知りたい。まさに、前回島根県の隠岐島前高校の話をした時に、あそこは県立高校でありながら海士町という町が大きく関わり、

その高校の企画推進をしている。これも事例の一つである。

具体的に梶原町と梶原高校との関わりについて教えてもらいたい。

(川上委員) 整理していないので、間違っていたらいけないが、かなり前から梶原高校のOBや梶原町が梶原高校を支えてくれている。中高一貫教育校ということで推進協議会があるので梶原町と津野町から支援をしてもらっている。地域をあげて支えていこうという非常に強い思いがあり、町から支援をいただいている。

(委員長) 大方高校も地域と密接に連携をしているが、町から寮設置の話はないか。

(坂本委員) 学校関係の寮を市町村がつくるというところまではいっていないが、できれば県の施設で空いているところがあれば使わせてもらえたらいいなと思う。

(委員長) 今、寮の話、通学に関して特に中山間の話が入ってきて、これに関してもう少し意見があれば聞きたい。

(瀧本委員) 今、県立高校への地元自治体の関与ということで話がされているが、私の立場は県地教連の代表としての立場だ。出身は土佐市である。土佐市と、地元の普通科の県立高校としての高岡高校との関係について、現在の状況を踏まえ話したい。高岡高校普通科については市も心配をしている。充足率等については、後の協議ということであるが、資料2P3の充足率を見ると平成15年度は81.3%、平成24年度は45.0%とマイナス36%で、大変危機感をもっている。市議会でも高岡高校を心配している。高岡高校について、3月議会の一般質問で取り上げられ、答弁した。自治体の関与ということであるが、県立高校なので市としては関与等については十分なことはできていないが、高岡高校の定時制については定時制を振興する義務があり、市から毎年補助金が30万円程度でている。子どもたちへの補助はさせていただいている。また、体育の授業や部活動のために市民体育会館を無料で貸している。市議会としても全面的な援助は惜しまないと言っている。これからも地方自治体としても高校にできるだけ援助関与をしていきたいと考えている。

(委員長) 自治体の立場で紹介をしていただいた。県立高校が所在している市町村の関与は大きなポイントである。これによって充足率の改善にもつながっていくのであれば積極的に連携をしていかなければならないということは明らかである。制度的なものを含め限界がどこにあるのか知っておく必要がある。ここまでの議論で、作業部会で議論していただく課題を整理して申し送りをしたいと思う。設置されている市町村とのかかわりの中で、要望などは非現場の立場から聞かせてもらいたい。これに関しては寮の話も入ってくる。通学の実態、通学に係る経費的な部分についても考えを聞きたい。寮についてはいろいろなやり方があるが、子どもたちの宿泊の施設に関してもいろいろな視点で、こういうものがあればこういう改革ができるのではないかといい意見も聞きたい。ここまでの話を作業部会に送りたい。

ここから話題を変えていく。ここまでは中山間を含めた中心部から遠いと

ころの議題であったが、その中では禰原高校の連携型の中高一貫教育校の話も入っていた。中心部の高校についても課題があれば議論していただく必要がある。垣内委員に現場の立場で課題はたくさんあると聞いたが、具体的には聞いていない。現場を含めていろいろな立場から中心部の普通科高校に対して何か課題として捉えていることがあれば聞きたい。

(山崎委員) 前半議論していただいた話は、修学に係る環境整備のことだと思う。普通科高校に何を求めるのか、そういうことを考えてみるとキャリア教育の冊子P1の中にあるように、小学校段階、中学校段階、高等学校段階で求めているものが違っている。「県民の声からみてみます」の中に、「高等学校においては、自ら考え主体的に判断する力、職業教育、進路指導の充実、思いやりの心の順で求められています。」とある。これは、修学の中身である。修学の中身のことについてどうあるべきかをまず議論し、それに対して環境整備をどのように進めていくか議論すべきである。

全県一区になって、高知市周辺校に希望者が集まる本質は何かということを含めて論議しなければ全体的な課題に結びつかないと思う。

(委員長) まさに本質論として提案いただいた。交通手段・環境については追随することである。就学についての中身や全県一区になって高知に希望が集まることについての背景も考えなければならない。

(濱川委員) 今までの議論は親として大事である。もう一つ私が子どもに親として思うことはなんだろうと考えたときに、高校を出て、20代半ばで子どもが経済的にも精神的にも自立してくれないと困るなというのが親の思いではないか。高知市の学校にも行き、感じるのは知的には問題はないが、発達障害のグレーゾーンの生徒がたくさんいる。そこで、誤解を恐れずに言うと、わがままだとか、言い過ぎになるが、怠けと捉えられかねない生徒がいる。中学校までは手厚い指導を受けていたが、高校に入ったときに、その支援がなかなか受けられにくい傾向があるなということで、通信や定時制にはあるが全日制高校の中にも、そういう子どもたちへの対応が必要ではないか。大学ではピアサポートなどやっている。高校は、その点への対応が一番薄いのではないのか。

(委員長) 子どもたちの教育目標の中に自立できるということがある。一方で今社会的にも問題になっている子どもたちに対して、高校でのサポート体制は少し薄いのではないかという意見であった。こういう点についても議論がいるとのことである。こういった意見を現場がどう受け止めているのか気がかりなことであるので、作業部会で議論を重ねてもらいたい。親の立場でという話があったので、一般的な話でいいので、お願いしたい。

(岩原委員) 子どもが高校を選ぶ時、将来的に考えて普通科がよいのではとの話をした。本人が将来的に畜産のほうに進学するにしても、選択肢を広げる意味で、まずは普通科でいろいろと勉強して、将来を見てどうするか決めればとの話をした。中学校から高校に入る段階で将来をはっきりと決めているわけではない。その場合、親も心配で安全な普通科を選ぶところはある。普通科

へ行ってその先どうするかを考えた時、勉強して大学というコースがある。大学へ行って就職をするわけだが、高校を出て就職の場合、専門高校を選ぶという選択肢もある。今、普通高校に求めるのは進学である。農業高校に行っても大学へ行きたいものもいる。専門高校の場合普通教科が少なく、センター試験等への対応は難しい。農業高校へ行って進学に支障が出ている生徒もいる。普通科は進学のためということがある。

(委員長) 選択肢を広めるといいながらも、大学からの就職も厳しい。大学を卒業する時でも何をするか決まっていない学生も多い。このような不安を抱え、まずは選択肢を広めるために、普通科に進学をといういのが親の気持ちとしてある。

(澤田委員) 連携型の嶺北高校でお世話になっている。連携とはいえ高校進学段階で外へ出る子は多い。背景には、自分の目指す将来の職業に就けるかが大きな原因であろう。親は少々無理をしながらも外に出すという形である。嶺北高校も大学への進学率は上がっている。それぞれの地域の学校も勉強すれば大学へ行けると思う。

(委員長) 普通科は大学進学が非常に大きいウエイトを占めている。それにどこまで答えられているか。それぞれ環境としてどうなのか考える必要がある。これが中心部と中心部以外で受検生の動向において、アンバランスが生じている核心である。私立高校は中心部に多い。約1,700人という生徒数である。旧学区ごとに見て、それぞれ10%程度で地元中学校から私立高校へ進学している。普通科を考える場合は、私立も含めて考えていかなければならない。地域の県立高校は、中心部に子どもたちを引き付ける魅力を学ばなければならない。

(宮地委員) 企業がどういうことを求めているかということで、高知のキャリア教育の冊子を見ると、コミュニケーション能力というものがある。学力は社会で生きていく中で、基礎的な読み書き計算は必要だと思う。大学受験の学力も一定は必要だが、社会に出ることを考えるとコミュニケーション能力が重要である。

それが、高校生にも必要である。高校から大学に行くと、中学と高校でも同じだが、全く知らない人が急に集まって、その時にいかに自分が知らない人に接するか。これが今の子どもにはわからないのが心配である。社会に出た時は、こういうことの連続なので、知らない人にどう接するか考えることも高校時代において大事なことである。

(委員長) 高校の学力の主要なものとしてコミュニケーション能力をあげてもらった。その意味で人と人の情報共有、思いを共有するコミュニケーション能力の重要性が高校教育においても必要である。

(宮上委員) 本年度、大学の役割としてキャリア支援ということがあるが、大学全体の就職という面でキャリア教育について考える機会が増えた。キャリア教育は小中高までではなく、大学4年でも完結するものでもなく、そして大学で専門学校的な資格を得て現場に行くが、その後も様々な資格を取り、現場

で経験を積み、それからまた発達していく。学校教育の中だけでキャリアが完結するわけではない。高校として何が必要か、大学で何が必要か考えていく必要がある。コミュニケーション力はそういう面で大事になってくる。どんな仕事をするにしても人間としての力、人間力が大事である。その上に専門的な知識技術が身になっていくので、教育の中でそういったところに力を入れてやってほしい。

(委員長) 大学の立場で高校に求めている力、人間力といった言葉もあったが、それに対する基礎の重要性についての話をもらった。一例としてコミュニケーション能力が重要であるとの内容であった。高校のキャリア教育に大学がどこまで関わっているかも課題である。産業教育の各分野で大学の話もあったが、普通科との連携という面で、地元の大学として3つの大学があって、高校のキャリア教育に大学がコミット（関わって）しているか、必要があるのではないかという点も議論してほしい点である。

(坂本委員) 黒潮町のポリコムテレビ会議システムの利用について、大方高校でも運営できないか県等に要望を上げていたことがある。中学校では、中高一貫でやってきてもその子が外に出てしまう。その原因には、高校の教育の内容に満足できない部分がある。それが産業教育であれ普通科であれ、子どもの中で満足できる教育システムを小さな町で入れてやることができる。それができるのはITであるとの考えがある。大学と連携しようと思っても、大学へ行かせるには費用や時間がかかる、ロスも大きい。連携したくてもできない部分がある。大学と遠隔地をITで結ぶ。そういうようなハンディを補う手法を使えば、中高でやってきた子どもたちがまた地元でと考える。高大連携は有効である。子どもだけではもったいないので、役場の職員や学校の先生の研修などに活用すればコストも下がるのではないか。

(委員長) ICTを活用すれば地理的ギャップや時間的ギャップ等を埋めることができる。一方ですでに活用している事例等もあると思う。作業部会でも具体的な事例等について協議をしていただきたい。

中心部の話や私立はあまり意見が出ていない。私立の部分を協議しないのはどうかと思う。

(山崎委員) 企業は企業で方向を決めてやっている。普通高校もこういう方向に行くという前提をする、地域のニーズ、実状を踏まえて我が高校の進むべき方向はこうだということを掲げて取り組めば普通高校であっても特色ができるのではないか。清水高校の普通科の課題の部分を見ると、「地域と結び付きを強め、国際理解教育等の学校独自の取組をさらに充実させていく。大学進学を希望する生徒の市外への流出を避けるために、進学実績を伸ばす。」とある。このニーズに答える、教員の資質面も含めて取組がなされているかどうか。これがなされていればまだまだ地域に残る中学生はいる。もう一回高校の基本に返って検討する必要がある。

(委員長) 例えば高知西は「ハードスピリット」が校訓であり、企業理念に相当するものをより明確にして特色を出してもらいたい。さらには、課題として明確

な目標を掲げているところは、ここに共感して生徒が集まってくれば地域の支援もでてくる。資料3に関してこのような意見が出たことも踏まえて作業部会でも協議してほしい。

実践するうえでの先生方の覚悟や数的な部分、通常は県立高校と言いながらも独自性が求められる。それぞれが何を指して、何をするか、それを担う教員がどこまで覚悟をもって使命を全うするか。ここにかかっている。それに対する現状がどうかを聞いてみたい。

もう一つ加えると、私立の教員には多分自校出身者が多い。もし、自校出身者の違いに私公の違いがあるのならば、母校に対する愛校心、原動力としての思いという面にかかわってくるのではないか。先生方がどこまで思いを共有して、覚悟を決めて子どもたちの教育に携わっているか。ここに県立と私立との差があるとすれば、考えるべき道も見えてくる。同じことで中心部と中山間部との県立高校間でさまざまな実態の違いがあるとすると、解決の糸口があるのではないか。困難かもしれないが、こういったところまで作業部会で検討してもらいたいと思う。

(垣内委員) 作業部会ではあまりできないかもしれないが、ぜひそれは協議してもらいたい。学校の特色は何だろうとよく考える事がある。どこの学校でもできる事は特色にならない。たとえば文武両道では特色にはならない。清水高校のジョン万次郎については、高知南高校の国際科、高知海洋高校、この3校はまさしく国際人というものを輩出してきた高知県の人材を材料にすることができる。他の学校では扱えない。そういうものを使って学校の特色をPRしていく。中高一貫の南高校はかなり努力してきた。意識の改善には、教員の意識の改善と子どもたちの意識の改善がある。子どもたちの意識の改善では、キャリア教育の効果が大きい。

(委員長) 作業部会でどこまで議論していただけるかは、作業部会委員長に任せたい。山崎委員の話の中から、学校の特色、意識の改善といった本質的な話も出ているので、それを取り巻く環境等について課題として協議してもらいたい。総合学科についてもつながっているところである。総合学科について意見、作業部会への申し送り等もないので、普通科の一環として取り扱うこととする。

<(3) 本年度のスケジュールについて>

(企画監) 本年度のスケジュールについて説明

(委員) 確認

<(4) その他> なし

3 閉会

- (1) 閉会挨拶 (教育次長)
- (2) 次回開催日程の確認
- (3) 諸連絡